

あ
け
び
の
山

はらだいこ
雨山 電信

成人向
FOR ADULTS ONLY



こんな山の中で
飛ばすんじゃ
なかったよ

ああ、
やっちゃった

失くしたなんて
ママに言ったら
何て言われるか…



珍しいのう
●●●とんぼ
ぶりきの蜻蛉が
飛んできおったぞ

これは
おぬしの
獲物が

わーっ
毛虫!!
毛虫!!

わは
おい童

わしや







++?



あけびは

たぶん
間違いない
人間じゃない
僕の友達だ



すごい...

この辺りが
全部
見渡せるよ...



喰へ



誰そ一緒に
食ろうた方が
美味いもんじゃ

相手があらず
「食いがたが
キタナイ
なあ」

ガムシ

ガムシ





死んだ
じいちゃんが
よく話してた
山の妖怪

ウソだろ
本当に
いたなんて

あけびじや

喰うか？

名前を聞いても
教えてくれないので
僕は彼女を「あけび」
と呼ぶことにした

僕も彼女に名前を
教えなかったので
ぼうずと呼ばれる
ことになった

えっ？

何これ？
なんかの
さなぎ？

なんじゃ
今時の童は
あけびの実も
知らぬのか

あ

おいしい

そうであろう
そうであろう





僕は別に
怖くなんて
なかった

あけびは
悪戯好きだけど
優しかったし、
ぼくの知らない遊びを
いっぱい知っていたから



彼女の顔は
とても
きれいで

僕は何度も
触れそうになつては
手を引っ込めた







アッ...

美味そうだ
喰うて
しまうぞ

ああ もう
我慢できん

ほさっと
するな
わっば♡

ぬしも裸に
なるんじゃよ









はちゅん♡

はちゅん♡

はちゅん♡

はちゅん♡

はちゅん♡

はちゅん♡

はちゅん♡

はちゅん♡

ちゅん♡

よいきゅ
ぼうずっ

はちゅん♡

はちゅん♡

たか
昂ぶるっ

はちゅん♡
孕めっ
ぼうずっ

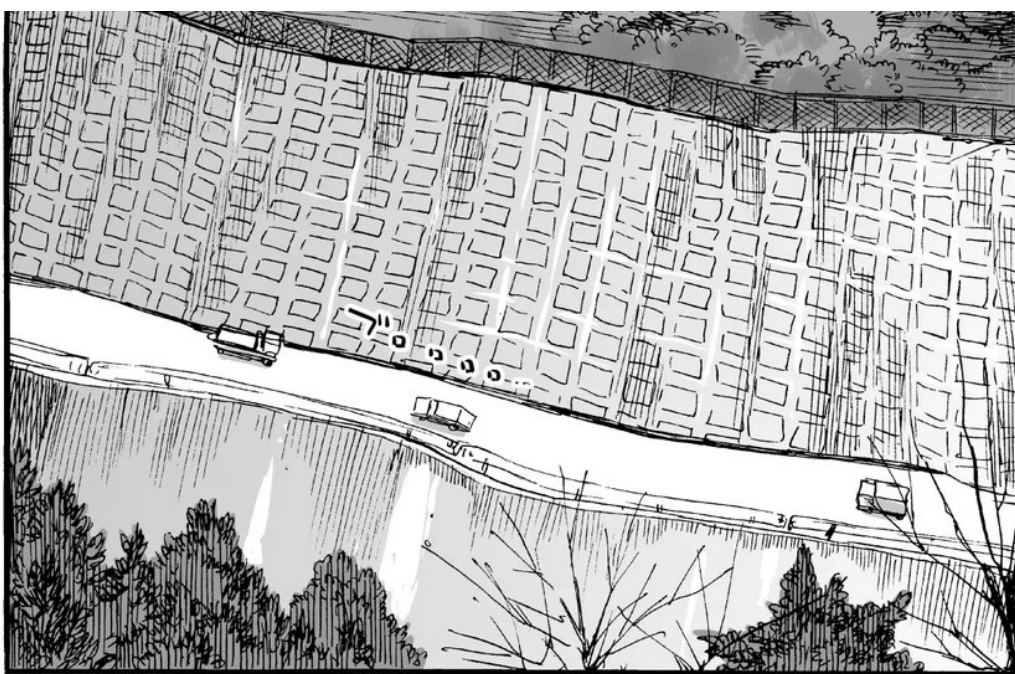
はちゅん♡

はちゅん♡

はちゅん♡

はちゅん♡

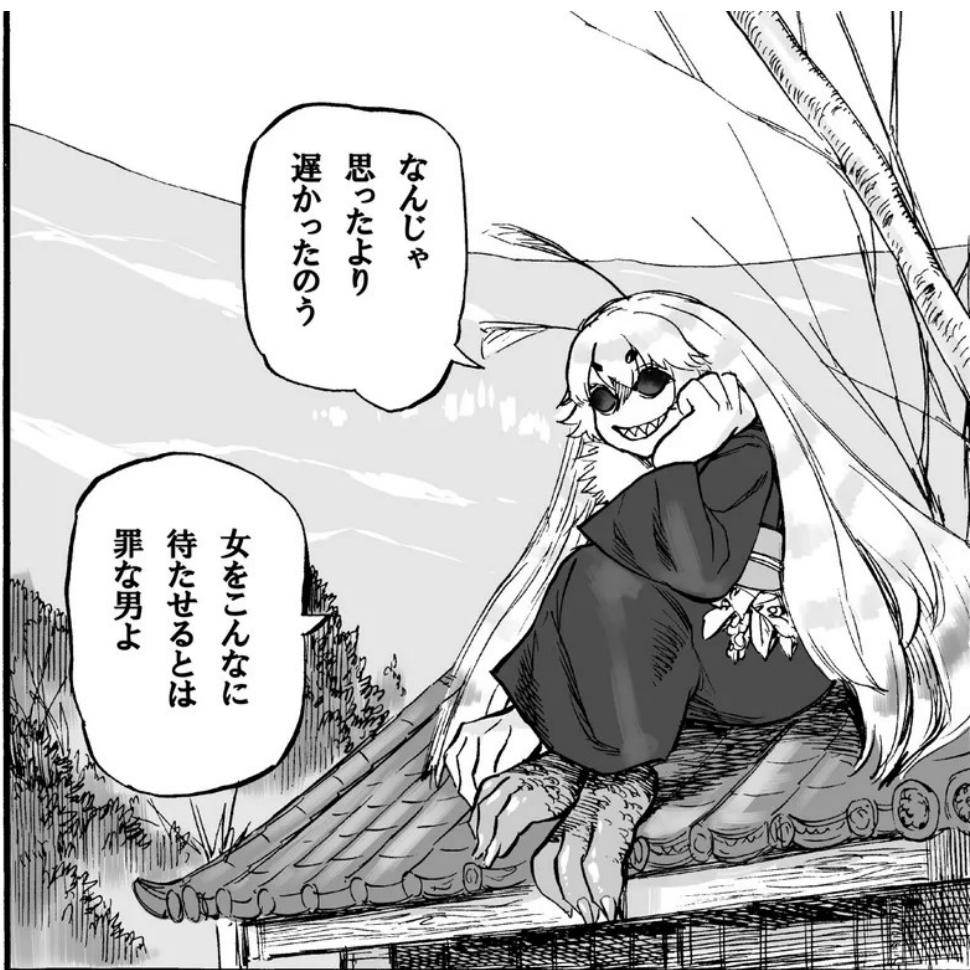






ああ
そのままだ

あの日から何十年
わたしが胸に
抱き続けた
そのままの





おたのしみ

まだ
許さんぞっ♡

ニニニ

ニニニ

ニニニ

おたのしみ

おたのしみ

おたのしみ

一滴残らず
わしの中に
注ぎ込めっ

おまえの
全てっ

おたのしみ

おたのしみ

おたのしみ

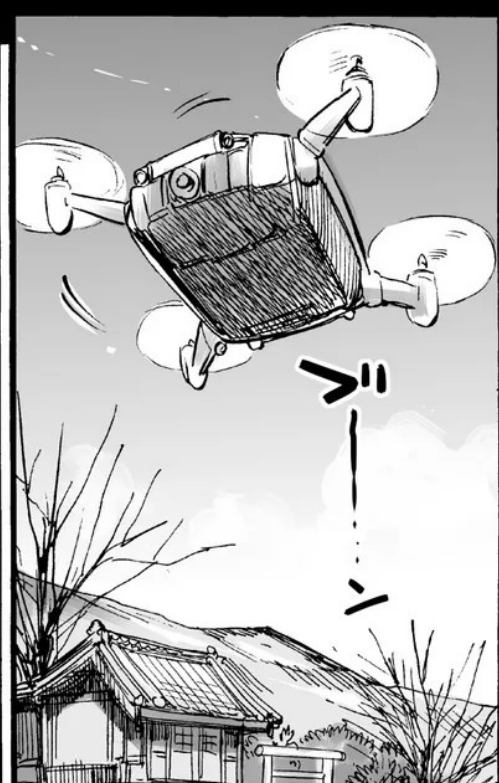
おたのしみ

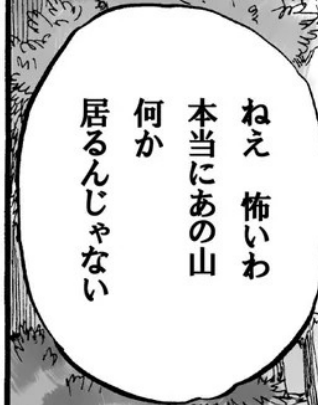
ニニニ

ニニニ

はら
わしの胎に
全部——っ！







”ああ もう我慢できん
美味そうだ 喰うてしまうぞ——。”

それはたぶん
日本のどこにでもある、
人里からそう遠くはない
秋の里山で起きる物語。
都会暮らしの少年は
美しく愛らしい
山の妖怪”あけび”に
心を寄せてゆくが——。
抒情に満ちたシナリオと
濃厚なプレイのハーモニー。
はらだいこと雨山電信、
二人の異才の邂逅が生み出す
ノスタルジック人外婚姻譚。

雨

雨山電信社
AMEYAMA TELEGRAPH

2019



日曜日の午後十時。門限を四時間も破った腕白盛りのバカ息子の帰りを、台所で頬杖を突きながらひたすら待つ。

人参とブロッコリーのグラッセを付け合わせにした煮込みハンバーグに被せたラップにはびっしりと水滴が浮いている。

少し前までは学校が終わるや否やランドセルを投げ出して鉄砲玉のように家を飛び出しても、あらかじめ夕飯に好物が出ると言っておけば、どれだけ遊びに夢中になっていても門限前にはびたりと帰ってきた。

まだ子供とはいえ、さすがにもうハンバーグに釣られる年ではないと、一人息子の成長を実感すると同時に一抹の寂しさを覚える。

数年前、夫が骨董に凝っていた時期に買ってきた年代物の掛け時計の長針が動く音がやけに癪に障る。

隣の家からかすかに漏れ聞こえるバラエティー番組の下世話な笑い声、蛇口から水滴がぽたぽた落ちる音。遠くから聞こえる救急車のサイレンの音。普段は気にも留めない音がやたらと耳につき、昂った神経を逆なでする。

夫がいればまだ気が休まるのだが、年相応に社内で出世して管理職になってからは忙しく、今日のように休日出勤も珍しくなく、日付が変わってからの帰宅もざらで、最近はまともに会話を持つ機会も少ない。

忙しい。疲れている。子育ては君の仕事。時代錯誤な家庭を顧みない仕事人間ぶりに出るのはため息ばかり。

「はああああ、いつ帰ってくるのよお」

夜中に家に一人でいると気が滅入って、どんどん悪い方向に思考が流れていく。

ひょっとして事故や犯罪に巻き込まれたのではないかな？

テレビの向こうのことだと無責任に思っていたセンセーショナルな事柄がひしひしと胸に

迫り、にわかに現実味を帯びていく。

「どこほっつき歩いてんのよ……」

不安が頂点に達して、頭を抱えて半ば涙声を滲ませた時、玄関の方で人の気配がした。

結婚してから十キロ以上太った夫特有の重量感を感じられない。

リビングからそっと顔を出して玄関を見ると、小さな背中に不釣り合いな大きさの正方形のドローンケースを背負った愚息がこそこそと靴を脱いでいる。

ここから抜き足差し足忍び足でリビングの母親に気づかれないように二階の自室に滑り込み、一日の汗と汚れが染み付いた服を脱ぎ散らかしてしれっとベッドで寝入り、こちらの怒るタイミングを与えず、うやむやにしようという姑息な魂胆が透けて見える。

「こらっ！今何時だと思ってんの！」

そうは問屋が卸さないと、地 Bing から出て階段の前で仁王立ちして収まりの悪い間抜けな箒頭に向かって近所迷惑にならない程度の怒声を浴びせかける。

「いいいっ！お、お母さんっ！」

ぎょっと目を丸くして完全に蛇に睨まれたカエル状態。息子が怯える姿は正直心苦しい。しかし、叱るときはきちんと叱るのが親の務めというもの。

「その汚れた格好で布団に入るつもり！誰が洗濯するのよ！」

靴下の先は汗で茶色く変色してシャツも半ズボンも泥だらけ。いくら子供とはいえ主婦の苦労も考えてほしい。

怒鳴りながら息子の全身を舐めるように見て、怪我の類がないかを事細かにチェックする。

このくらいの年頃の男の子は多少の怪我で母親に泣きつくのは恥ずかしいという変なプライドがある。

この前もサッカーで遊ぶ際にできた切り傷を隠して放置して化膿したことがあったので些細な傷でも消毒と絆創膏の治療を受けさせるよう目を皿にする。

(どこも異常はないわね……ん？この匂い……)

わずかに、ほんのわずかに鼻をかすめた甘い匂い。

(これ……あけびの匂い？！)

どうしようもない懐かしさと言ひようのない嫌悪感が同時に下腹部から湧き上がってくる

「……あんた、また”あの山”にいったわね？」

有無を言わせずまっすぐ視線を合わせると、ぎくつと肩を震わせて、あからさまに目を泳がせる。図星だ。分かりやすすぎる。

「だって、じいちゃんの買ってくれたドローンで遊びたいんだもん……」

去年の正月。ラジコン飛行機が趣味だった父が目に入れても痛くない初孫にお年玉代わりに買い与えた高機能ドローン。

最近では飛行場所の規制も厳しく住宅地や公園では気ままに飛ばせないなので、去年の今頃に執り行った父の葬式が終わった後、実家の裏山で日が暮れるまで飛ばして遊んでいた。

それ以来、ゴールデンウィークやお盆など実家に帰省するたびに山遊びをしていが、最近では一人でバスと電車を使い継いで片道二時間かけて通っているらしい。

電車は一時間に一本。バスは二、三時間に一本も珍しくない田舎。大方遊び惚けて、乗り過ぎてこの時間に帰宅というオチだろう。

「あんな遠くまで行かなくても、ドローンの飛行可能場所が分かるアプリをスマホに入れて上げたでしょ！」

スマホのアプリで調べれば近場に良い場所がいくらでもあるだろうに、よりもよって、あんな”不気味な山”まで出向くだなんて、どうかしている。

「で、でも！あそこがいいんだもんっ！」

追い詰められてぎゅっと眉根を寄せたかと思うと、感情を爆発させた。

家の外まで聞こえるような大声を上げたかと思うと、脱兎のごとく階段に向かって駆けていく。

「こ、こら、待ちなさい！」

まだ話は終わっていないと、逃げ出す息子を追いかける。

学生時代はバレー部所属で運動神経にはそれなりに自信があったはずだが、一日の大半を家で過ごす主婦業の運動不足が祟り、伸ばした手は空しく空を切り、ダダダと階段を駆け上がり、半年前にあてがったばかりの子供部屋に飛び込んでボタンとドア乱暴に閉めてカギを掛ける音が聞えた。

「はああああっ……まったく、あの子ったら……」

深いため息とともに頭を抱える。外国被れの夫の意見で息子の自立を尊重うんぬんで、あの年で個室を与えたのは間違いだったか、煮込みハンバーグは明日の朝食に回すとしよう。

「ふあああ、眠い……」

息子の帰宅で緊張の糸が切れると、猛烈な睡魔が押し寄せてくる。

もう寝る。最早、怒る気力も失せた。主婦の朝は早い。

「はあ、ドローンに夢中なんて……まだまだ子供ね」

年甲斐もなく老後の趣味でラジコン飛行機を飛ばしていた父しかり、男はいくつになっても

もああいうのに夢中だ。

しかし、違和感がある本当に息子はドローンを飛ばすためだけに、”あの山”に行ったのだろうか？

実家の裏山は秋になれば、燃えるような紅葉で覆われる。あけびを初め山の幸が実り、凍てつく冬を前にして生命の豊穡で満たされる。

実家に帰省した夫は壮観だと感心していた。

確かに美しいのだろう。

しかし、自分には人を喰らう怪物の臓物の赤さとは思えない。

子供の頃、兄と一緒に山で遊んでいる時も”何か”に見られているようで怖気が走った記憶がある。

去年、父が実家近くの山で死んだ。

ミイラのように干からびた全裸の遺体で発見され、警察の事情聴取で根掘り葉掘り聞かれたが結局事件性は見受けられず、遭難による衰弱死と判断された。

しかし、自分を含め、親族である”死因”に納得しているものなど一人もいない。

七十過ぎの高齢ながら父は、しゃんとしたもので認知症の予兆すら見受けられなかった。

ガンで先立たれた妻の後追い自殺か？と無理矢理に納得している遠縁の者もいたが、見当違いもいいところだ。

父はあの山に棲む”何か”に喰われた。

いや、父が”何か”に喰われに行った。

理屈ではない。身体の芯の部分がそう囁く。

葬式の時に親戚の一人から聞いた話では、遡れば江戸時代から、明治に大正、昭和と数十年に一度の間隔で親族の男の誰かが、必ずあの山で不審な死を遂げているらしい。

いずれも不慮の死で処理されたらしいが、これは偶然と言えるだろうか？

ひょっとして、息子に父は山に棲む”何か”に魅入られているのではないか？

「あの山は、どう考えてもおかしい……！？」

しかし、疑念と焦燥感が最高潮に達した時、何故か、また、あのあけびの甘い匂いが鼻をついたような気がした。

「あ、あれ……？」

どういうわけか、胸を占めていたどす黒い感情がずっと胸から引いて、凪いだ海原のように心が穏やかになっていく。

……疲れて考えすぎかもしれない。

”何か”なんて非現実的だ。馬鹿馬鹿しい。もしかしたら向こうで新しい友達ができてだけかもしれない。

そうだ。今のうちに息子が、あの山に勝手に行かせるくらいなら日帰りで家族旅行なんていうのもいいかもしれない。

夫にも疲れたなんて言い訳はさせない。息子も遊びに行かせる代わりに疎かにしている勉強をみっちりさせる。

どちらかという旅行は行くより計画を立てる方が楽しい私は、あれこれと考えながら夫婦の寝室に向かう。

何故か懐かしく感じたあけびの甘いにおいの残滓を残して一。

つづく

後姿は
まんま虫我の
シルエット

あけび



後ろ姿は
まんま虫の
シルエット

あけび
(着衣)

たぬき餅の
シチュエーション



この度ははらだいこ×雨山電信のあけびの山を購入いただき誠にありがとうございました。

雨山電信氏の描く美しいビジュアル。はらだいこめのロリババアの理想を詰め込んだ作風いかがでしたでしょうか？

本作は本来ロリババア専門誌永遠娘に投稿用に用意した原稿でした。しかし、永遠娘編集部に雨山先生の素晴らしい作画は高く評価されましたが、わたしが永遠娘の雑誌傾向を読み切れず不採用になり、こうしてDL販売というかたちで世に出した次第です。

雨山先生の都合があるならシリーズ化したいと考えているので、続刊があればまたよろしくお願いします。

それでは、またにゅくす堂の次回作でお会いしましょう。

注意事項

- ・18未満の閲覧購入を禁止します。
- ・作品画像の無断転載は絶対にやめてください。レビューなどで画像が使用したい場合は事前に連絡していただけるとありがたいです。
- ・本作品はフィクションであり、実在の団体、人物とは一切関係がありません。

以上の注意事項を守って作品をお楽しみください。

にゅくす堂 主宰：はらだいこ

メール：qqateaocnnejp@yahoo.co.jp

ブログ：http://blog.livedoor.jp/haradai/

twitter:https://twitter.com/qqateaocnnejp

pixiv:https://www.pixiv.net/member.php?id=748004

FANBOX:

https://www.pixiv.net/fanbox/creator/748004?utm_campaign=www_profile&utm_medium=site_flow&utm_source=pixiv